

審査の結果の要旨

氏名 柳煌碩

韓国における保護者の教育アスピレーションの高さはよく知られており、従来は「圧縮的近代化」「家族主義」などの概念で説明されてきた。他方で近年、「ペアレンティング」の階層差に関する研究が世界的に蓄積されている。しかし、こうした従来の研究には、政策や公的言説からの影響、ペアレンティング主体の主観的解釈の内実、長期的な構造変動の把握という諸点に関して課題が存在する。本論文は、政策研究・言説研究・インタビューという複数の手法を組み合わせることにより、これらの諸課題の解明に取り組んでいる。

上記の問題関心、先行研究レビュー、方法論を示した序章および第1章に続き、第1部は民主化以前、第2部は民主化以後に焦点化した各章から構成される。

第1部の第2章では戦後から80年代までの家族政策と教育政策を検討し、前者では出産抑制と教育への効率的投資、後者では私的利益に駆動された教育熱への批判という矛盾をはらみつつ、一貫して子どもの養育・教育を家族責任とみなす「政治的家族主義」が濃厚であったと結論づける。第3章ではベビーブーム世代の女性（母親）へのインタビューにより、自身の若年期における階層的・地域的な格差経験を「家庭環境」の責任と解釈することが、自らの子どもに対しては家庭環境を最大限に整え教育達成・地位達成を実現しようとする「キャッチアップ型」のペアレンティングにつながっていたことを指摘する。

第2部の第4章では、90年代以降の教育政策の整理と、70～80年代生まれの母親へのインタビュー調査の結果に基づき、自身の受験経験を否定的に捉える意識と選抜制度改革への対応から、「英語」と「読書」が子どもの教育・地位達成のためのオルタナティブな教育戦略として選び取られていく様相を描く。第5章では、今世紀に入り政策的に推進されるようになった「親教育」のテキストの分析から、児童心理学や脳科学に基づき愛情を強調する政策への変容を見出している。第6章では、親教育プログラムに参加した母親へのインタビューから、「統制志向」「学習志向」「愛情志向」のトリレンマから生じる葛藤や不安が、プログラムにおける自己の生育史の振り返りと自己変革（「遡及的方法」）および「無我愛的子育て」の推奨により一定の水路づけがなされている様相を描いた上で、そのプロセスはペアレンティング自体が教育の対象となる権力的作用を含んでいることを指摘する。

最後の終章では、各章の知見を総合し、政策面ではメリトクラシーとペアレントクラシーの共存と交差、公的言説面では経済性の強調から心性の強調への変容、個人の主観においては可視的・物理的な家庭環境の整備を主とするペアレンティングから非可視的・心理的な家庭環境の整備への力点の移動、というダイナミズムが論じられる。それは「子どもを産み育てること」をめぐる国家と個人の両面での再帰性が高進してゆくプロセスでもあり、その極限化が世界最低とされる出生率に反映されていると結論づけている。

本論文は、インタビュー調査対象が大都市中間層に限られていること、ジェンダーの観点が前面に出ていないこと、他国との体系的比較には及んでいないことなどの制約を含んでいる。しかし、ペアレンティングという切り口から、マクロな政策・言説とミクロな個人の双方を視野に入れ、かつ戦後韓国社会の長期的な変動と特徴を描き出そうとする意欲的な研究であり、各章の分析の詳細さと、従来通説的に使用されてきた諸概念の批判的再定位に取り組んでいるという点で、明確な研究上の貢献をなすものである。よって、本論文は博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断された。